

の真偽を訴えるところの実験的検証過程がこの最後の仮設に立っていることから明らかである。

このようにして物自体概念は形而上学的構成理論の第一歩であると著者は説く。これはアポステリオリに有効性を得られることをあらかじめ見越した仮設概念である。これは幼い子供や未開人が漠然とそしてやや非能率的に使っているごとき物自体概念と、意識的かつ科学的に使う差こそあれ本質的に異ならない。ここから形而上学の終点である神の構成概念にまで至るには気の遠くなるような精神の長い思弁的進展があったし、これからもあるにちがいない。しかしこれからさき形而上学のどのような未開の境地に進もうと、また形而上学がどれほど有効に實在に切り込んでいることが証せられようと所詮仮設の域を出ないのである。著者の立場はその経験實在論を徹底させることによって仮設に始まり仮設に終ることを暗示するきわめて柔かい存在論になったのである。これを著者の相対主義的変節というべきか。しかし著者は存在論が最終的には最も有効な仮設であることを豪も疑わない。存在論は人類が最も長くかつ最も広くもちうる経験的知識であるということに独断的な信頼を寄せているのである。ここに著者のきわめて楽観的な健全な精神がある。

Jan Pinborg : Die Entwicklung der Sprachtheorie im
Mittelalter. 366 S. 1967, Aschendorff, Münster.

柏 木 英 彦

周知のごとく、中世の *grammatica speculativa* (思弁的文法学) は *modus significandi* (意味の様相) の面から言語を研究するが、思弁的文法学者の著作の多くが *De modis significandi* と題されているところから、彼らはモディスト (*modistae*) と呼ばれる。語が意味を持つのは、精神が音声にある意味の様相を与えることによってである。これによって音声は語、品詞となり、ものの属性を表わす。つまり語はなにかを意味するものとしてのみ研究の対象となる。R. ロ

ビンズが『古代中世文法論』で *De modis significandi* は今日の言葉では「意味論について」とでもするところだと説明するゆえんである。パウル・レーマンとマルティン・グラープマンが *Sprachlogik* と呼んだ中世の言語哲学については、両者の文献学的研究をもとにさらにその内容を明らかにすることが期待されていたが、資料の大半が写本であり、しかも著者未詳のものが多いという事情もあって、これは容易に実現しなかった。本書はこの期待に答える労作である。

著者 Jan Pinborg は、コペンハーゲン大学の H. Roos 教授指導の下に、現在知られている写本のすべてを検討し、著者自身の発見した写本も加えて、これを駆使しつつ思弁の文法学の発展を叙述する。著者によれば、*sprachlogisch* という言い方は一つの統一のジャンルを表わすものとしては厳密さを欠く、むしろ「意味の様相」を中心に据えることによって内容的に統一のある言語理論を示すことができる。

1240年頃、文法は個々の言語にかかわるのではなく、一般的原則を問題にし、これによってはじめて文法は普遍的学となりうるという主張があらわれた。キルウォドビにとって文法の対象は個々の言語から離れた *sermo significativus* であり、ペーコンにおいても文法の本来の対象は音声ではなく、*significata generalia et consignificata* である。モディストは、言語の本質的原理を文法の対象とし、実用文法と思弁文法とを区別する。彼らが註釈を加えるプリスキアヌスの著作は実用文法と見なされる。細部にわたって意見が一致しているわけではないにしても、とにかく思弁文法の対象は言語の本質的原理であり、原理から文法の独自の論理を展開するゆえ、思弁の文法学は *scientia rationalis et demonstrativa* である。彼らは「意味の様相」の観点からすべての文法構造、品詞の定義、統辞論を展開し、単なる論理学的文法でなく、言語の固有の論理を示そうとする。つまり論理学に対して、思弁文法を独自の普遍的学として理解する。

「意味の様相」というジャンルの成立は十三世紀の60年代であり、この頃から1285年頃までの代表的人物はダキアのマルティヌス、ダキアのボエティウス、ヨハネス・ダークス等デンマーク出身の学者である。1285以降モディストの言語理論はテキストの数から言っても諸学説の錯綜という点から見ても、頂点に達する。

ダキアのマルティヌスの『*Modi significandi*』はエルフルトのトマスの著作が

あらわれるまで非常に愛好された本であり、中世言語理論を「意味の様相」という新たな観点から綜括する。特にその統辞論は独創的である。「意味の相様」は *Proprietas rei consignificata per vocem* と定義されるが、それは *forma partis orationis* でもある。ところがダキアのポエティウスでは、事物や *modi essendi*、言語と世界の連関等は文法学者に関係がない。文法の対象はむしろ記号であり、「意味の様相」は記号の属性である。マルティヌスとポエティウスの間には、たとえば文法は *scientia sermocinalis* か、文法は音声を対象とするか、文法は *res praedicamentales* を対象とするか、また *modi significandi, intelligendi, essendi* は同一かといった問題について意見の相違が見られる。つまりこの時期に二つの対立する考え方があり、一方はマルティヌスとヨハネス・ダークスに代表され、文法および「意味の様相」と事物との関連が決定的であるのに対し、もう一方はダキアのポエティウスの立場で、それによると文法と「意味の様相」は自立的領域を成し、それ自体として探究されねばならない。

1285年以降「意味の様相」に関するテキストは増加し、マルティヌスについての註釈があらわれる。著者はアルベルトゥス・スウェベリヌス、チングロのジェンティリス、シモン・ダークス、ラドゥルフス・ブリト、エルフルトのトマスおよび著者未詳の写本をもとに、学としての文法、品詞論、統辞論について論究する。文法が思弁文法であるかぎり普遍的学であることに変わりはないが、さらに文法は *scientia sermocinalis* か *rationalis* か、*practica* か *speculativa* か、「意味の様相」は独自の領域を成すのか等の問題について変化が見られる。ダキアのポエティウスにとって文法は *scientia sermocinalis* であったが、ダキアのマルティヌスとヨハネス・ダークスでは条件つきで認められているにすぎない。それ以前には、この点ははっきり区別されていなかった。アベラルドゥスにおいてもパリのニコラウスにおいても文法と論理学はいずれも *scientia sermocinalis* である。ところが今や人はこの点をはっきりさせねばならないと考える。つまり概念を扱う論理学は *scientia rationalis* であるが、言語のみを扱う文法は *scientia sermocinalis* である。しかしこれによって言語の表現の面と内容の面は切り離されることになる。もちろんこの傾向は中世における言語理論の出発点となった『命題論』にも暗に含まれてはいるが、それほど徹底して考えられていなかった。

ただオッカムと違って、モディストは「sermocinalis」を否定的に考えているわけではなかったから、これによって思弁文法の学的性格を貶めることになるとは思っていない。文法は言語の表現の面に限られるのではなく、文法が探究する原理は個々の言語から離れた *sermo significativus* であるとの意見もあり、また文法学者は事物と *modus essendi* にはかかわらないというダキアのポエティウスの見解に対する反駁も見られ、問題の立て方もポエティウスのごとく、*sermocinalis* か *realis* かではなく、*sermocinalis* か *rationalis* かであった。次に文法は *scientia speculativa* か *practica* かという点についても変化が見られる。文法学者が扱う「意味の様相」が知性の産物であり、その存在を思弁知性に負うとすれば、思弁知性の中にしかあり得ないことになるとの異論に対して、文法を実践知性と関連づけようとする人も出てくる。しかしそれは文法を単なる実用文法にする危険を孕む。事実、後に唯名論者の攻撃を受けてから、モディストはこのように言わざるを得なくなった。すでにペトルス・アウレオリにおいて論理学が *scientia practica* とされているが、オッカムはさらに徹底して論理学、修辞学、文法はいずれも *notitia practica* であると述べている。このことは知性の受動性の強調、意味と対象に関する新しい考え方と密接な関連がある。盛期スコラ学において語は第一に概念を意味し、第二に事物を指示する。トマス・アクィナスにおいて本来の記号は語であり、概念は本来の意味での記号ではなく、*similitudo* である。ところがオッカムは記号をまったく別様に理解し、概念は自然的記号であるが、語は概念に従属するかぎりで事物の記号であると主張した。

この時期で特に重要な人物はエルフルトのトマスである。それは第一に、思弁的文法学の一つの中心であるエルフルト学派に対する影響のためであり、第二にドゥンス・スコトゥスのものではなくエルフルトのトマスの著作であることをグラープマンが明らかにした『*Novi modi significandi*』がモディストの文法の教科書として中部ヨーロッパで広く用いられたからである。なおこれは文献学的事柄であるが、エルフルトのトマスがパリでマギステルの学位を得たとするグラープマンの推測は近年 C. Verhaak の研究によって確証された。クルトレのシゲルスの *logica vetus* 註釈はトマスの註釈と類似しており、両者は1300年頃パリの人文学部で同じ教授の下で勉強したと考えられる。ただグラープマンがエルフ

ルトのトマスのもので挙げて著作の中、『Liber de constructione』と『Novi modi significandi』とは同じものである。著者はそれ以外に『命題論』と『Liber sex principiorum』の註釈をトマスに帰している。エルフルトのトマスは、スウェベリヌスを、あるいは直接ダキアのマルティヌスを論駁するが、『Novi modi significandi』は叙述が明快でモディストの文法学のよき手引書であることから、マルティヌスの著作にとってかわり広く用いられるとともに、以後の論争の出発点となった。1330年にはすでに多くの註釈が見られる。

文法の領域において実在論と唯名論の衝突がはじめて生じたのはエルフルトにおいてである。本書の第2部はこの問題を扱う。著者はまずエルフルトの学問的背景を描き、次に中世言語理論の発展の転回点をなすヨハネス・アウリファベルの学説とその意義を究明する。アウリファベルが1330年頃エルフルトとバルベルシュタットで活躍し、「意味の様相」を攻撃したことは確かであるが、彼がパリで学位を得たというグラープマンの想定は現在のところ証明できない。グラープマンは彼に多くの著作を帰しているが、ことはそう簡単ではない。グラープマンは十四世紀にヨハネス・アウリファベルという名前のマグистерが二人いたことを見逃している。それはともかくアウリファベルの重要性は、唯名論の立場に立って「意味の様相」を攻撃したことにある。著者はアウリファベルの『Determinatio de modis significandi』と、著者自身が解説し本書第4部においてはじめて印刷されたモディストのテキストとによって、アウリファベルと彼をめぐる論議の実態を明らかにしてゆく。写本の処理などから見て、第2部は著者がもっとも力を注いだ部分であろう。

アウリファベルによれば、「意味の様相」は知性が勝手に作り上げたものであり、普遍的学としての文法の基礎にはならない。言語は記号であるというのが彼の基本的考えであるが、しかし本来の記号は概念であり、言語は第二次的に記号にすぎない。しかも概念は事物の自然的記号であり、両者の間に一義的な因果関連があるが、語は恣意的記号にすぎず、言語は意味を持たない手段である。事物と概念の関係は理抛の関係であり、この関係は認識作用の間しか存在しないように、語の意味は語が使用される間しか存在しない。文法学者は、言語によってそれぞれ異なる音素のみを扱い、個々の言語について個々の文法があるにすぎない

い。オッカムにとって意味は独自の存在を持たず、言語の *proprietas* に実在の *proprietas* は対応しない。そこではスポジチオとコノタチオが「意味の様相」にとってかわり、*oratio vocalis* でなく *oratio mentalis* の真理内容が問題となる。アウリファベルの議論はこうした考え方を文法の領域に適用したものにほかならない。

唯名論的な立場からの批判は、盛期スコラ学の認識論を攻撃することによってモディストの言語理論の基礎をぐらつかせたとと言える。ただし唯名論者は「意味の様相」の個々の点に立ち入って反駁したわけではない。が、今や意味の問題は論理学との関連で扱われることになる。アウリファベル以後の言語理論の展開について著者は第 3 部で簡単に説明しているが、唯名論的立場に関してはアイイのペトルスとジャン・ジェルソンを取り上げる。一方モディストの文法学は十六世紀に至るまで講義されたが、フマニストから最後の一穂を受ける。「意味の様相」の知識がなくても、ラテン語を立派に書くことができるではないかと。

以上、大要を紹介したにすぎないが、本書によって思弁的文法学の具体的内容について——ここでは触れなかった品詞論と統辞論についてまとまった知識を得ることができるのみでなく、神学部と直接関係のない哲学運動の一つについても知ることができよう。巻末にはモディストの文法学に関する写本の目録が挙げられている。本書に加えて、H. ロースとともに著者が校訂し目下印刷中のダキアのポエティウスの『*Modi significandi*』、*Corpus philosophorum danicorum medii aevi* に入っているダキアのマルティヌス、ヨハネス・ダークス、シモン・ダークスのテキスト、それにかつて G. Wallerand が校訂したクルトレのシゲルスの著作等を精読することによって、さらに語類の意味論を、あるいは意味論的言語哲学を展開することも可能であろう。

ところで意味論と言えば、現代の意味論は言語と思想の問題にも論及し、たとえば E・ライジィ、L・ヴァイスゲルバー、わが国では関根正雄、井筒俊彦両教授が試みたごとく、各言語固有の世界像を描き出す。中世思想を、十三世紀スコラ学において頂点に達すると見る体系論的観点からすると、中世人の思惟はどうしても図式的な単色の様相を呈する。しかし、かねがね思っていたことであるが、中世では一つ一つの言葉の喚び起すイメージは教父時代に比べて乏しいとしても、

意味論的分析というパースペクティブを導入することによって、井筒教授の言葉を借りれば、a concrete, living and dynamic ontology を、あるいは少なくとも、より陰影に富む中世精神の営みを浮彫りにすることができるのではないだろうか。（なお本書は *Beiträge zur Geschichte der Phil. u. Theol. im Mittelalter* の Band XLII, Heft 2 である。）